

やまぐち自然派宣言

共存から共生へ⑤

エベレスト街道トレッキング

平成23年を振り返って

第9回日本オオサンショウウオの会

山口県岩国市錦町大会の報告

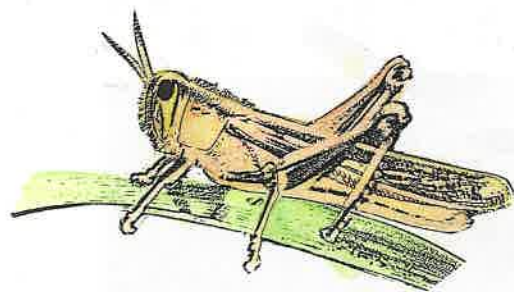
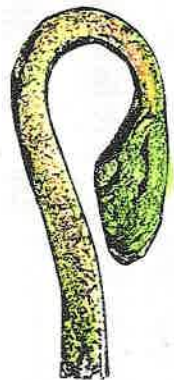
アクアソーシャルフェス！2012

榎野川もり・かわ・うみ自然再生プロジェクト 報告記

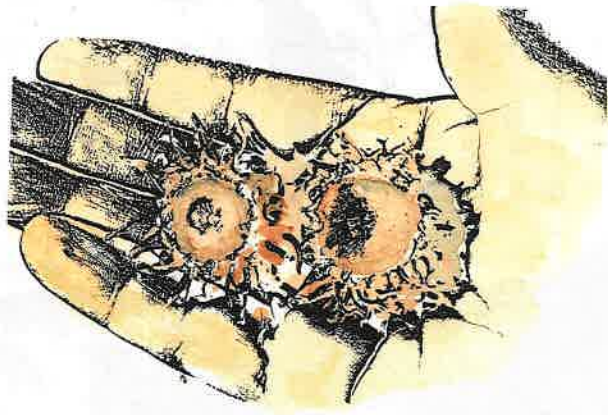
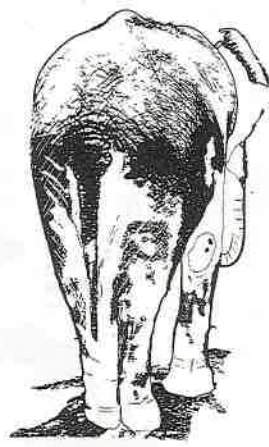
自然観察指導員講習会を終えて

第9回リレーミーティング

龍王山 報告



共生



祝
表彰

弟見山のカタクリの保護
技術者教育と生命科学
ワークショップはおもしろい
ワークショップはステキな手法

共生随筆

やまぐち自然共生ネットワーク

平成25年2月28日

エベレスト街道トレッキング

開村修三

我々十一名（女性5名、男性6名、参加者は鳥取、大分、福岡、山口県からなる。）のネパール側からのエベレスト、トレッキングは、昨年十月二十八日に始まり十一月十一日までの十五日間の行程であった。この度は香港経由でカトマンズに入った。小生は、ネパールは三度目であるけれど、エベレストを眼前に見るといことは永い間願いながらも今迄実現しなかった。高山病、乾期でないという条件を入れると最低でも十五日間は必要ということ、しかも「ルクラ」への飛行は世界一危険なルートと聞いていた。実際テレビを見ていた際に飛行機が墜落したと丁度一ヶ月前にニュースがでた。何度か計画を一部中止するか検討したが、一人を残して小生に一任するという事で計画を続行し、最後になつて一人も同意してくれて一緒に行動することができた。同乗してきた一人のネパールの若い女性が乗車中必死でお念仏を唱えていたことも後から聞いた。ルクラ空港は絶壁の断崖上に四百六十メートルの滑走路があるのみから危なげなものだった。ここから歩いて歩いて、途中ヤク、子馬、水牛たちと道や

橋の上ですれすれで離合するなどして後にした。重たい荷物を運んでいた。エベレストの大自然も素晴らしかったけれど、そこで生活している人々、動物もそれぞれ一生懸命に生きていくことに感動した。ナムチェバザールからラマ教最大の寺があるタンポツェへと向かい、シエルパの里クムジュンを通り、四千メートル近くのシャンボチの丘にある世界最高所のエベレストビューホテル（日本人が作った）からは、エベレスト、ローツェ、アマタプラム等の山々を見渡せ感嘆の極みだった。途中、三浦雄一郎氏らと出会い、NHCC（会長、開村）の活動のうち救急車をネパールへ送つたなどから、ネパールの大統領とも二度のボディーチェェックの後、会見することができた。

さて、新年最初の視覚障害者との周南市内



の万葉の森ウォーキングは、十一名で一月十三日に実施した。参加者は厚狭、防府、周南、光からだった。森の中にナギの木、カリンの木、その果実のひとつが落ちていた

のでその効用などを語り、ホーの木の葉を手にとつてみせたり姫シヤラ、ヤシヤブシの幹肌などに直接触れて貰ったりした。視覚障害者の人は始めての体験なので驚いたり感動したりしていた。最後に東屋で美味しいイチゴを賞味しながら自己紹介、感想などを述べ合った。山口ささゆり会では月一回（第二日曜日）万葉の森をウォーキングしている。参加してみたいと思われの方は一緒に森を楽しみませんか。



平成23年を振り返って

第9回日本オオサンショウウオの会

山口県岩国市錦町大会の報告

錦川オオサンショウウオの会 白井啓二

第9回日本オオサンショウウオの会山口県岩国市錦町大会が平成24年9月29日30日に開催され、オオサンショウウオの研究者、保護団体など、全国から100人が参加しました。開会式には山本繁太郎山口県知事、福田良彦岩国市長をはじめ多くのご来賓の皆様にお越しいただきました。

第7回岡山県真庭市大会の時に、2年後の開催地として決定し、それから準備を進めてきました。まず、引き受け団体の「錦川オオサンショウウオの会」を設立し、会員を募りました。その結果、大会当日は、スタッフ80人。全国から来られた方もスタッフの多さに驚いていました。半年前に実行委員会を立ち上げ、週一ペースで会議を重ねてきました。それに合わせて、セーブジャパンの事業を行い、観察会、勉強会、生息地周辺の清掃活動、保護活動の看板設置など計4回の事業を行いました。小学生、中学生、高校生、一般のみなさん、延べ150人のみなさんに参加して

いただきました。本物の野生のオオサンショウウオを身近に見てびっくりしていました。全国大会は9月29日、岩国市錦町の錦ふるさとセンターをメイン会場に開催されました。12時から受付開始、13時から日本オオサンショウウオの会の総会、13時30分から開会式を行い、はじめに、大会実行委員長の畑原基成県議会議員が挨拶、つづいて日本オオサンショウウオの会の桑原会長が挨拶、来賓の山本繁太郎山口県知事、福田良彦



岩国市長が挨拶し、その後、地元の生息地の保護活動を行っている岩国市立宇佐川小学校の児童のみなさんが大会に合わせて表彰されました。開催地紹介で、地元の岩国高校広瀬分校の生徒のみなさんが手作りのDVDで岩国市の素晴らしさを紹介しました。基調講演を防府市の高川学園の村田教諭が「宇佐川のオオサンショウウオの調査について」話されました。休憩の後、各地からの研究報告で、鳥取県日南町の小学6年生「日野川におけるオオサンショウウオの分布調査」、京都大学の松井正文教授の「京都市産オオサンショウウオの現状」について、京都には食用として



輸入された中国産のオオサンショウウオが川に放され、それがハイブリッドとなり、現在、日本オオサンショウウオは1ペアセント、近いうちに全滅するだろ

う、それが全国に広がらないようにしなければならぬことでした。第10回大会は京都で開催されます。広島県東広島市から「地域と大学との連携による保護活動をめざして」というテーマで広島大学総合博物館のみなさんが発表されました。東広島市は第11回大会開催地です。「兵庫県市川水系におけるオオサンショウウオの生態」について日本ハンザキ研究所の栃本理事長が話し、東京の河井さんが「自作グッズの制作、販売で楽しむオオサンショウウオを応援」、生息地の西限、大分県宇佐市の教育委員会の「オオサンショウウオの生態調査の概要報告」、広島市安佐動物公園の研究員の田口さん、足利さんによる「飼育下繁殖から分かったオオサンショウウオの繁殖生態、33年間50産卵の分析」興味深い話でした。鳥取大学岡田先生の「鳥取県南部町東長田川におけるオオサ



ンショウウオの現状について「北広島町の「三ちゃんS村の活動」、日本ハンザキ研究所の田口さんの「オオサンショウウオの七不思議」、清水さんの「三重県のオオサンショウウオ保護活動管理指針2002の10年」、高川学園科学部の「宇佐川のオオサンショウウオについて」、地元宇佐川小学校の「オオサンショウウオの学習報告」、岩国土木建築事務所の「宇佐川堰堤浚渫工事に伴うオオサンショウウオ生態調査」、最後に私が「錦川オオサンショウウオの今後の取り組みについて」で報告会を終わりました。美祢市の林業家のチェンソーアートでオオサンショウウオを3体作ってもらいました。現在もふるさとセンターホールに展示しています。

懇親会の後、宇佐川の生息地に夜間見学会に行きました。



全国からの研究者がウエットスーツを着て、ライトと網を持って川に入ると、6匹のオオサンショウウオを見つけました。2日目も朝早くから、堰堤直下の生息地に行きましたが、10匹のやせ細ったオオサンショウウオを見つけました。研究者たちは口々に「こんなやせ細ったのを見たのは初めて」、堰堤直下にオオサンショウウオの個体数が増えすぎてエサが不足しているからだろうとのことでした。緊急保護して飼育し、ある程度大きくして自然に返すのがベストだろうとのことでした。これからその活動がスタートしようとしています。



『企業と社会と地域住民が相携えて、よりよい明日を作ろう』と、トヨタ自動車の協賛で、全国五十カ所で水辺の環境保全の取り組みが始まった。

山口県では、榎野川流域連携の取り組みが認められ、多くの仲間と一緒に考え、楽しみながら、汗を流し【山口湾にアサリを呼び戻すため、榎野川をキレイにしよう】を合い言葉に活動が始まった。

この取り組みのお約束で、三回の継続イベントを組むこととなった。

第一回目 アサリの生活環境再生を目的に「干潟耕耘作業」

五月五日(こどもの日)はれ。午後一時公募に応じて二百名を超す仲間が集まった。

先ずは腹ごしらえ。朝早くからフシノメンバーと漁協婦人部の皆さんにより、山菜、稚鮎の天ぷらやアサリ汁にご満足。

開会セレモニーに続いて早速作業開始。やま耕耘・うね耕耘・母貝団地増設・生物観察会



作業後集合写真



干潟耕耘作業

・アサリレスキュー等に心地よい汗を流した。この干潟耕耘作業も年を重ねて今年で九年、当初はその効果を疑問視する者もいたが、「行動は起こしてみよう」「汗は流してみよう」とある。僅かずつでも確かな手応えを確認して一同大満足。

第二回目 榎野川の源流を守る運動発祥の地「四季の森整備作業」

六月十日(日曜日)はれ。大学生や県市の職員、更に一般公募の皆さんに地元仁保自治会の方々もご参加頂き、総勢八十余名。先ず平成十三年に突如として持ち上がった産業廃棄物処分場対応運動と、四季の森との関わりや、地域通貨フシノについて説明。

続いて動力刈り払い機や長柄の中刈り鎌の使用等安全上の注意喚起後、下草刈りを実施。川や海に思いを馳せながら、作業に汗を流した。

「榎野川の源流を守る運動」の経緯な



ど年と共に人々の記憶から薄れていくのがチヨット寂しい思いがしたが、何とか語り継がなければならぬと痛感したところである。

第三回目 榎野川「まるごと体験ツアー」

八月十一日（土曜日）に子供たちを対象にバスツアーを企画したが、生憎の荒天でやむなく中止となる。

第四回目 榎野川中流域の活動「榎野川まるごと体験学習、アユ産卵場整備作業」

九月二十九日（土曜日）は、会場を小郡ふれあいセンターに設け、「榎野川の源流を守る運動について」（岡事務局長）、「森を楽しむ」（吉光副会長）、「アユから見た榎野川」（田中理事）、「榎野川河口の干潟について」（元永



県主任技師）からそれぞれ榎野川の現状について説明。続いて榎野川流域の山野に自生する草木（アカネ、コブナグサ、タブ、クヌギ）を



草木染め体験



榎野川天然アユの塩焼き

染料として草木染めを体験。各自自前のハンカチを貰ってご満悦。
お昼は、榎野川天然アユの塩焼き、シジミ汁とおにぎりで腹ごしらえ。
午後からは、いよいよアユの産卵場の整備作業。総勢七十余名。

アユの産卵を促すため、川底の礫を均一に敷き詰め礫間の砂の掻き出し、こぶし大の石を除去するなど、榎野川流域活性化交流会の皆さんのご指導を頂いて完了。

三回の企画を無事終えることができました。

多くの皆様のご参加を頂くとともに、トヨタ自動車及び山口新聞の積極的なご助言をいただき、心からお礼を申し上げます。今後とも榎野川のすばらしい環境を後生に引き継ぐため、尚一層のご理解とご協力をお願いいたします。



アユの産卵場整備

自然観察指導員講習会を終えて

山口県自然観察指導員協議会

事務局長 大田和彦

はじめに、「自然観察指導員」とは、地域に根ざした自然観察会を開き、自然を自ら守り、自然を守る仲間をつくるボランティアリーダー、自然保護教育の実践者です。講習会で養成される自然観察指導員は、「資格認定」されるものではなく、日本自然保護協会（NACSJ）に「登録」されるものです。「自然観察指導員講習会」とは、3日間の日程で行われる室内講義や野外実習を通して、自然保護の基本的な考え方や自然観察の方法・指導の実際を学ぶものです。主催は、日本自然保護協会及び自然保護・自然保護教育に賛同する団体です。受講対象は「自然保護について関心が深く、自然保護教育の重要性を認識し、自然観察の指導推進に意欲がある満18歳以上の方」となっています。

今回、山口県では5年振りに自然観察指導員講習会が、平成24年10月26日〜28日、国立山口徳地青少年自然の家で行われました。定員60名に対し、参加者は30名と少なかったのですが、県外から11名の参加があり、鹿兒島や名古屋からの参加もありました。受講生は、それぞれ各地域で活躍され

ている人ばかりでした。講師陣は、NACSJから清末幸久

氏、田畑清霧氏、

地元講師として

田辺護（植物）、

田中浩（動物）、

赤間正（地質）

の各氏です。そ

れぞれ第一線で

活躍しておられ

る人ばかりです。事務局としてNACSJ

の大野正人氏には講習会全般に渡り大変お世

話になりました。

初日の講義は、「自然の保護」について田

畑氏より熱く分かりやすい話がありました。

身近なところで、自分で考え、気づき、行動

することの大切さや生態系や生物の多様性

（生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多

様性）を保護することの重要性が分かりまし

た。

2日目の講義は、「自然の観察」について

清末氏より、自然を観察していく中で、自然

保護について考え、活動していくことが大切

であること、自然観察会をすることにより、

自然を豊かなまま次の世代に渡すこと、自然



観察会の3つの要素：自然に親しむこと、自然を知ること、自然を守ることや自然観察の危機管理「さしすせそ」最悪を想定し、慎重に、素早く、誠意を持って、組織で動く等実際の観察会で役に立つ具体的な話を聞くことができました。

2日目の野外実習「地域の自然を理解しよう」で、植物、動物、地質についてそれぞれ50分ずつ野外実習が行われました。植物については、森の見方、植物の見分け方、表徴種、フイトンチッドなどについて学びました。動物については、糞や巣穴の観察に始まり、巣穴がどれくらい延びているか実際に土を掘って、縦横に延びていることを発見することができました。

地質では、様々な岩石の前に、火成岩、堆積岩、変成岩についての説明を聞いた後、岩石をこの3グループに分ける作業をしました。受講者は、だいたい正しく分類することができていまし

